

此処は、ブーケニアと呼ばれる世界。大地の中心に聳え立つ世界樹から供給された元素を宿した生命が育まれる場所。様々な種族が生活する中で、『ヒト』と呼ばれる生命体は知能を有し、文明を発展させていた。

ただ、彼らは、いわゆる『人間』とは違う。羽を有する者、身体を岩のように硬化させる能力を持つ者、指先から糸を出す者……生活圏に応じて、ヒトは特別な力を会得していた。

しかし、此の世界は今、存続の危機に瀕している。大地を汚し、生命を喰らう『魔物』が現れたことよって。

月の見えない夜。ホーンは短刀を片手に、鋭い牙を持つ魔物と交戦していた。

(残りは五体か……この程度なら、一撃で倒せるな)

ホーンは腰を下げ、前傾姿勢になる。足に力を込め、襲い掛かって来る魔物たち目掛けて飛び出した。

稲妻の如く、魔物の群れを駆け抜けたホーンは、涼しい顔で魔物たちを背にした。無防備な彼に魔物たちは襲い掛かろうとするが、それは叶わない。魔物たちの急所には、深い

傷が刻まれていたからだ。

「この程度なら、俺の敵ではない」

深紅のマフラーが闇夜に揺れる。ホーンが鞘に短刀を収めた頃には、魔物たちは塵となって消えていた。

任務を終え、ホーンは平原に佇む居城へ戻る。ホーンは執務室へ入ると、着替えを済ませ、ベッドのある自室へ帰ろうとする。

ホーンはふと、窓の外に目を移す。そこには、星の見えない空が広がっていた。

「……俺は家族のために、強くなれているだろうか」

金色の髪に隠れた左目が、遠くを見つめている。ホーンが手に入れたくても手に入れないものが、そこにはあった。

空を飛ぶための羽を有する彼ら一族にとって、城で生活する者は血の繋がりがなくとも皆『家族』だった。

また、彼らは女と男で、異なる役割を有していた。

女は、一族の繁栄を使命とする女王を筆頭に、多種族との抗争や魔物の討伐、食料や資材の調達など、外で汗を流す戦士や、育ち盛りの子供たちや戦士の面倒を見る給仕など、様々な仕事を与えられていた。

一方、男はというと、戦士にはなれなかった。理由は明確で、女よりも貧弱で、戦士として使い物にならないからだ。

生命の強さは、体内に宿す元素の量で決まっている。元素は魔力として還元され、肉体を奮い立たせるため、特別な技を使うため、何よりも生命を維持するために使われる。元素量が少なく、戦うことなど許されなかった。

彼ら一族の場合、女は一定以上の元素を保有しており、優秀な戦士としての素質を持った者は数多く存在する。一方、男はごく一部を除き、元素を保有出来る身体になかった。おまけに、彼ら一族特有の、背中の羽。残念ながら、男は上手く使えない者が殆どで、意味のない飾りをつけているだけなのだ。

劣っているのは、肉体的な力だけではない。精神的にも未熟な者が多い男は、城の中の仕事も与えられることはなかった。そのため、彼ら一族の男の役目はただ一つ。

女王に、一族の子孫を残すための番候補として選ばれることだけだった。

そして、ホーンはその一人。女王に認められ、将来を約束された、数少ない男。だが、ホーンはれっきとした『戦士』でもあった。

翌日。ホーンは城を出て、深い森の中を歩いていた。

少し前まで、勇ましく魔物と対峙していたホーンではあったが、その表情は曇っており、凜々しさは感じられなかった。

そして、その理由は明確だ。彼の前を歩く女傑の存在が、ホーンの憂鬱を加速させていた。

「ホーン、疲れが顔に出ているぞ」

圧倒的な威圧感がホーンを襲う。心なしか曲がっていた背筋が、緊張感を持ってぐっと伸び上がった。

「はっ、も、申し訳ありません」

「……普段通りの口調でよい。貴様は、余に対して常に反抗的であれ。わかったな」

「はっ……承知、した」

ホーンの前に行く女傑。彼女こそ、一族の女王だ。

『クイーン』と称されている彼女の真の名は誰も知らず、城の住人のほとんどが、彼女の素性を知らない。そんな中、ホーンは数年前からクイーンに気に入られ、彼女の従者として奔走している。

「……ああ、こういう言葉遣いは嫌。城主同士の集会なんてなければ、堅苦しい言葉なんて使わず済むつのに……ねえ、ホーンちゃん」

「……その呼び方は恥ずかしいからやめろと言っているだろ。仮にでも、あんたは王だ。もっとしつかりしてくれないか？」

「ああ、もつと言つて……ホーンちゃんに叱られたら私、ゾクゾクしちゃうの……」

いつもの光景ではあるが、ホーンは頭を抱えてしまう。クイーンが他の家族の前で厳かに振舞っている様を知っているが故に、くだけたやり取りが未だ、しつくりと来ていなかった。

「はあ……だいたい、城主たちの集會に、どうしてドレスを着てくれないんだ。みつともないと思われて困るのはクイーン、あんただろう」

クイーンは普段、豪華なドレスに身を包んでいる。しかし、この日纏っていたのは簡素なローブだった。クイーン曰く、動きやすさに勝る衣装はないと言いが、これから行く先は、近隣の城主たちが集まる場所だ。主たちの正装を想像するだけで、ホーンは胸が痛くなった。

「服装が気になるのか？ 心配するな。いつものことだ。そもそも、余も昔は戦士だった故、ドレスは好かん」

ホーンは生返事することしかできなかった。
クイーンがそう言うなら正しいのだろう。だが、言い知れ

ぬ不安はあった。見窄らしい格好ではないはずだが、重要なのは他の城主たちがどう判断するか。そのリスクを、ホーンは気にしていた。

(俺には、格好には気をつけろと言うのに、自分は少しでもいいのだろうか)

ホーンが身に纏う装束は、全てクイーンのオーダーだ。動きやすさを重視したズボンに、二の腕までを守られるアームカバー。身体にフィットするインナーは特殊な素材で出来ているらしく、薄さに反して敵からの攻撃をしっかりと守ってくれる優れものだ。ベストとマフラーに関しては見栄えがいいからと合わせてもらったが、ホーン自身もお気に入りではあった。

(まあ、クイーンが言うなら、俺が気にする話でもないか) 結局は、クイーンの判断に任せる他ない。答えが決まっていることに時間を費やしたホーンは、気怠げに息を吐く。

だが、問題はそれだけではない。次に彼の脳内を支配した悩みは、集會に参加するであろう面々についてだった。

(城主たちは我慢するとして……集會に、一人でも男が居れば……)

暑くもないのに、ホーンは一筋の汗をかいていた。
クイーンが右腕として選んだ、ホーンという男。一族では

屈指の実力者であり、責任感の強い人格者でもある。だが、これから集会に出席する城主たちの従者は、殆どが女だ。理由はホーンの一族同様、女が強い力を持っているため。そして、自分以外の男が集会に出席している未来は見えない。その様をイメージするだけで、ホーンは溜息が止まらなかつた。

「貴様、もしや集会に女が居ないよう願っているのではないか」

何を隠そう、ホーンはとかく、女が苦手だった。

「そ、そんなこと、あるわけないだろう……」

冷静を装うホーンだが、その声が震えている。前を歩くクイーンは思わず、苦笑した。

「……はあ、貴様、『女が怖い』という理由は、外の世界では通用しないと何度も言っているだろう」

クイーンの言葉に、ホーンは奥歯を噛んだ。

（わかっている、わかっているが……怖いものは、怖いだろう……）

ホーンは、見知らぬ女性を見るだけで震えが止まらなくなる『恐怖症』を思っている。戦士の弱点としては致命的だ。ホーン自身、それは自覚していたが、治る気配もあまりなく。今はひたすら、我慢を重ねているばかりだ。

（いや……文句を言っても仕方ない。強くなるため、己を律して、進むしかない）

クイーンの右腕として。そして、一人の戦士として。ホーンは強くありたいと願っている。その信念のため、雑念を振り払い、ホーンは立ち向かうことを決心する。

と、そんな様子も知らないはずのクイーンが、唐突にホーンへと問いかけた。

「ホーン、貴様は、王になりたいと考えたことはあるか」

クイーンが座す、王という場所。ただ、一族のしきたりとして、王になれるのは女のみであり、男が王になることは許されなかつた。

「いや、俺は一度も……ただ」

王になりたい、と考えたことはなかつた。その代わり、城で暮らす家族全員が、幸せである世界を作りたい。それが、ホーンの願いだった。

ふと、彼の脳内では、過去のクイーンとのやり取りが蘇る。彼がまだ、少年から青年へ成長する頃のことだった。

「貴様は、次の子を産むための番候補だ」

クイーンに言い渡された、番、という言葉。子孫を残すための種付け役として選定されることは、実に光栄なことだ

と言われていた。

だが、ホーンは違った。彼には他に目標があった。

「ありがたいお言葉ですが、クイーン、オレは戦士になりた
いんです。姉さんたちと一緒に戦って、皆を守る男になつて
……そして、兄さんや弟たち……皆のために働ける場所を
作って、家族みんながこの場所を守っていけるような、そん
な場所にしたいです！」

ホーンは高らかに宣言する。それには、大きな理由があつ
た。

女が全てにおいて優位に立つ一族が種の繁栄のために選
んだ道は、男に仕事を与えず、個体として優れた男だけを城
に残し、それ以外を排除するというものだった。

故に、ホーンは見てきていた。兄や弟が、城を追い出され
ていく様を。

それだけなら良かったが、もっと酷いのは、裏で兄弟たち
が姉妹たちの慰み者となり、虐げられていることだった。ク
イーンが目をかけている男には手を出さず、無抵抗な兄弟
たちを襲っては、再起不能になるまで虐め抜き、使えなくな
れば城を追い出す。そんな悪習がまかり通っていることを
知ったホーンは、現実には立ち向かうことを決めたのだ。

「ほう……面白いことを言うじゃないか。だがな、貴様に待

っているのは地獄だ。それでも貴様は、戦士になる道を選ぶ
というのか？」

ホーンの目に、揺らぎはなかった。

「覚悟は、できています」

そしてこの日から、ホーンは茨の道を歩み始めた。

「皆を守るためには、相応の地位に就けるくらいに、強くな
らなければいけないとは思っている。俺は、皆を幸せにする
ためなら何だってすると、決めたからな」

あれから五年程の歳月を経て、ホーンの目標は少しずつ
達成されている。だが、そのスピードを加速させるためにも、
ホーンは自身の成長が不可欠だと考えていた。

その言葉を受けて、クイーンは王の威厳を込めて、ホーン
に告げた。

「貴様には、次の試練が必要となりそうだ。そしてそれは、
貴様にとつて重要な試練だ。命の危険もある。それでも、貴
様は試練を受けるか」

命の危険、と言われて、ホーンにも緊張は走る。だが、彼
はこれまでも沢山の試練を乗り越えてきた。ホーンには自
負があった。必ず、乗り越えられると。

「ああ、受けてみせよう」

これが、ホーンにとつて想像を絶する試練になるとは、この時は知る由もなかった。

場所は移り変わる。クイーンが総べる城の中で、ホーンを良く知る者たちが彼の話を繰り広げていた。

「兄ちゃん、今日も仕事かーっ」

机に突っ伏して、エイトは口を尖らせる。

腕や臍を露出するコートに、裾の広い半ズボン。野を元気に駆ける、快活な少年らしい格好をしている。まだまだ発展途上ではあるが、クイーンには素養を認められており、これからの一族の中核を担う存在として期待されている。

ホーンとは、血の繋がった兄弟の関係。エイトにとつてホーンは憧れで、ヒーローのようなかつこよさを兼ね備えた、頼もしい存在だった。

かつて、ホーンはクイーンの命を受けて城を逃げ出したことがあった。そしてその時、彼はエイトを連れて、城を逃げ出した。遠く離れた集落でホーンが戦士としての鍛錬に勤しんでいる間、その姿を間近で見てきたエイトは、いつしか兄のようになりたいと願うようになっていた。その願い

は、今も変わらない。

「はい。本日はクイーンとお付きで、他の城主との集会に出ています。その後は夜の魔物討伐に出られて、明日はホーンさんが抱えている小隊の模擬戦闘の手合わせに出られると……」

エイトの嘆きに、リリスは丁寧に応えた。

リリスは、この城に住まうヒトとは種族が違う。この世に害をなすものとして生まれたとされる魔物の一種、ヒトの雄の精を貪り生きる、『サキュバス』だ。

ある事がきっかけでクイーンに気に入られ、姉のリリムと共に城の給仕として働く彼女の姿には、淫らな印象は受けない。水色の髪に、ぱっちりとした瞳。給仕用の制服に身を包み、主にホーンの身の回りの世話を担当している。また、彼女は城の住人とも良好な関係を築いている。こうして、エイトたちの会話に平然と混ざっていることが何よりも証拠だ。

「ちえーっ、オレにも仕事くんねえかなあ」

不満を垂れるエイトの隣で、少女はやれやれと首を振った。

「エイトはまだまだこれからでしょ。ホーンに勝ったことなんか一度もないんだからさ」

少女の名前はレイン。彼女もまた、ヒトではない。この世界を守護する『精霊』だ。

ピンク色のポニーテール。草原に咲く花のような、スカート部分がふわつとしたワンピース。外見は凛とした少女だが、彼女は世界の長い歴史を見て来ている。

彼女の存在は、エイトとの邂逅に遡る。

城を抜け出したホーンとエイトは仲良く暮らしていたのだが、ある日、城の戦士たちの策略によって、ホーンが城に連れ戻されてしまった。いつか帰ってくると言い残したホーンだったが、彼はエイトの元へ帰って来ることなく、二年の歳月が過ぎた。

兄が帰ってくるよう、エイトは集落の近くにあった世界樹に何度も願った。ホーンに、もう一度会いたいと。

その願いを叶えるために、そして、この世界に起きていた変調を救うために降り立ったのが、レインという精霊の正体だ。

凶暴化し、数も増えている魔物の調査や討伐をしつつ、エイトに力を貸し与え、共に戦っている。そんなエイトとは最初に出会ったこともあり、城を離れたところで共に生活していた。

レインとホーンは、互いに本音をおつけ合える友人のよ

うな関係だった。自分の考えや悩みを溜め込むホーンにとってレインの存在は大きく、レインもまた、責任感の強いホーンには一種の信頼を置いていた。

だが、この日のレインは違う。此処に居ないホーンを心配する素振りを見せていた。

「大体、あなたの兄貴は働きすぎ。そうやって身体を壊すヒトの子を何人も見て来たわ。ティモちゃんも、ホーンが働き過ぎだっと思うでしょう？」

レインの向かいで、ハーブティーの入ったカップに手を添えたまま動かないティモは、悲しげに薄緑の水面を見つめていた。

「はい……お兄様、最近は今までに増して働くようになって……私としては、もう少しセーブして欲しいなと」

ティモは、ホーンとは、血こそ繋がっていないものの、兄妹の関係である。

城の外で行動を共にしていた期間があるエイトに対し、ティモはホーンが帰還してから行動を共にするようになった。

エイトと同じく、ティモにとってのホーンは憧れであり、一種の特別な感情もある。

さらに、彼女は城随一の強戦士だ。華奢で、淀みのないま

つさらな見た目の少女でありながら、戦場では大剣からレイピアまで、さまざまな剣を使いこなす最強の戦士だ。その様は『戦乙女』と称されている。今のエイトでは相手にならず、兄のホーンでも敵わない強い力を持つ彼女は、クイーンからも将来の女王候補として囑望されている。

ティモがホーンのことを大切に想う一方、彼との間には苦い記憶もあった。幼い頃、ホーンがエイトを連れて城を出たことが原因で、当時ホーンと仲の良かったティモは城の住人から白い目で見られるようになった。幼い彼女にとっては大きな負担であり、この時から、ティモはホーンに対する憎悪を抱えるようになっていた。

三年ほど経ち、ホーンは城に連れ戻され、奴隷のように働かされることとなった。この頃、ティモは彼と行動するようになったが、些細なことでホーンと喧嘩をしたことがあった。ホーンのことを心底恨んだティモは、城に潜んでいた魔物の甘言に釣られて、身体を乗っ取られてしまい、ホーンを地下の処刑場に監禁するという事件を起こしてしまった。彼とは今でこそ良好な関係を築いているが、ティモにとっては未だに払拭できないトラウマでもあった。

「……あ、いざとなったら、これが反応して、お兄様を助けに行きますから」

ティモの頭に、ぴよこんと飛び出ている二本の髪。エイトにもあるそれは、リーダーの役割を持っている。家族、とりわけ、絆の強い存在がピンチに陥ったことを教えてくれる代物だ。

とはいえ、ホーンがそうそうピンチに陥ることはない。ホーンから救いを求めるサインが出ることは極めて少ないため、ティモは兄のことを心配するようになっていた。

「ホーンさんには言わないのですか？」

リリスに問われたティモは、カップを握り締めた。

「言えませんね……お兄様が頑張っているのは、私たち家族の歪なルールを変えるため……今までなら、エイトくんくらいの男の子はほとんどが……このお城を追い出されてしまいましたから」

優秀な血統のみが城に残ることを許され、それ以外の男は城に残ることを許されない。そのルールに異を唱えたのがホーンだ。彼の努力の結果、事態は好転しているはずなのだが、ティモの表情は浮かないままでいる。

「今は男の子たちも、このお城で暮らす権利が与えられました。ただ、その分お兄様は……」

しかし、仕事が奪われることを恐れた住人の一部は、ホーンを虐めるようになった。初めは恐怖を植え付け、意見を撤

回させるために始まったものだったが、ホーンが忍耐強いことがわかると、行為はエスカレートした。

まだ幼かったティモも、その行為を目撃したことがある。彼女にとって、ホーンは一緒に遊んでくれる優しい兄だった。そんな兄が辱めを受けている様を、ティモはいつか終わるように願う事しかできなかった。

「リリスさんなら、わかってくれるはず。お兄様は自分を犠牲にしても、私たちを守ろうとしてくれているのです」

それから時間が経つても、ホーンの状態は変わらなかった。クイーンに認められ、彼の理解者も増えた今ですら、ホーンは時折、城の住人たちの慰み者となっている。それも、たった一人で。

『この役目を否定して、エイトやティモや、他の家族に矛盾が向くくらいなら、俺は奴隷でも下僕でも良い』

ホーンは自己犠牲を是とし、ティモが止めようとしても、身体を売ることを止めなかった。身を削りながら働いている様を見ることは辛い、彼の意思を尊重しない選択肢もティモにはなかった。全ては、一族を縛り付ける、誤ったしきたりのせいだった。

「この城の歪さはわかります。ただ……ティモちゃんだってそう。戦士としては女の子の方が圧倒的に有利……女の

子が働き、男の子が子孫を残すために存在するというのは、構造としては理想なのかもしれません。ただ、わたしもこの世界では滅びに向かう種族のひとつ。世界にとっては生産性のない、ちつぽけな存在かもしれませんが、私だって、ちゃんと生きていきたい……だから、ホーンさんの行動にも、理解はできます……その、全てではありませんが」

リリスは、表情を曇らせるティモの顔を見つめていた。「それに、この城で仕事を貰えることになった時、ホーンさんはわたしにも優しく接してくれました。悪評をばらまかれた時も、いち早く訂正してくれたのはホーンさんでしたから」

群れることを嫌っている姉のリリムとは対照的に、リリスはヒトとの関わりを持つことに積極的だった。しかし、余所者に厳しい城の中で、かつ、サキュバスである事実も相まって、リリスは弟たちに夜這いをしている、と悪評を流されてしまったことがあった。

そこを助けてくれたのが、ホーンだった。彼女の存在を理解してくれる戦士や給仕と繋げてくれたことで、リリスは居場所を作れるようになったのだ。

「だからこそ、ホーンさんには自分を大切にしたいのです。わたしですらそう思うのですから、ティモさんなら

もつと、その想いが強いのでは？」

ティモは一つ息を吐き、カップを口に運ぶ。ハーブティーを少しだけ飲むと、彼女は少し険しい表情を見せた。

「リリスさんにはお伝えしましたよね。私が、お兄様を地下の処刑場で、酷い目に合わせたことがある、ということ。実は……未だにその日の映像を夢で見ることがあります。

実際には、お兄様に何をしたかは覚えていませんが、正直、お兄様が私を大切にしてくれることが理解出来ない程、私はお兄様に酷いことをしていました。そんな夢の中で、お兄様は毎回、『俺のせいで、ティモを傷つけた』と言うのです」

ホーンを地下の処刑場に閉じ込め、鞭で身体を撻り、あの手この手で精を吐き出させ、無能だと罵倒する光景。ティモが見る悪夢は、あまりにも鮮明だった。

何より、その悪夢はいつも、兄の懺悔で終わる。涙を流しながら震える声で謝るホーンに、ティモは構わず顔を蹴つて、罵倒する。『お前なんて、死んでしまえばいい』と。

その陰惨な様子が厭になって、ティモは真夜中に起きることがしばしばある。ホーンには黙っているが、ティモは兄を傷付けたトラウマから抜け出せずにいた。

「お兄様は、全てを自分のせいだと紐付ける悪い癖があります。もちろん、それがお兄様の良さでもあるのですが……」

今にも泣き出しそうなティモを見かねて、リリスは立ち上がった。

「ティモさん、わたしは、あなたの苦しみをホーンさんにも理解してもらう必要があると思います。ティモさんが我慢していることは、きっと、ホーンさんも望んでいません。もし、直接伝えるのが難しいならわたしからでもいいですし、エイトさんやレインさんを通じて大丈夫なはずですよ」

（つて、わたし、皆さんの中でホーンさんと一番付き合いが短いのに、こんなにでしゃばって……）

出過ぎた真似ではないかと不安になったリリスだったが、それは杞憂だった。ティモが口を嚙む隣で、エイトが身を乗り出してきた。

「実はオレも、兄ちゃんのこと心配というか……その、兄ちゃん、オレに何か隠してるんじゃないかって、不安になる時があるんだ。言いたくないことがあるのはわかるけど……寂しいよな、そういうの」

エイトの言葉に背中を押されたのか、ティモは何度も頷いた。

「……ですよ。私、やっぱりお兄様に、ちゃんと伝えたい。でも、お兄様は私が言っても、『俺がなんとかする』とか、『今は我慢してくれ』としか言わないと思うので……」

ティモは顔を抑え、ふうつ、と息を整えた後、紅潮する瞳をリリースへと向けた。

「……リリースさん、一つ、お願いしてもいいですか？」

ティモは、兄への密かな願いを、リリースへと伝え始めた。

＊＊＊

「疲れた……やっぱり、知らない女と同じ空間に居るのは俺には無理だ……」

集会から城へ戻ったホーンは、執務室へ駆け込んだ。椅子にもたれかかり、天井を仰ぐ。自分一人の空間が、ホーンの疲れを癒していった。

（悪い奴らじゃないとは分かっているのに、一目見ただけで震えが止まらなくなる……最近はそのほど、酷い目には遭っていないはずだが……）

身体を大きくしても、武器の扱いが巧くなっても、苦手なものは変わらない。甲高い笑い声、ほのかに甘い香り、カツ、と響くヒールの音。全てが恐ろしく、ホーンの胸を苦しめる。

「いつになったら……治るだろうか……」
己の弱さから目を逸らすように、ホーンは瞳を閉じた。



だが、目を閉じてすぐ、ホーンは眠りの中で魘され始める。震えながら吐き出した声は、クイーンに認められた戦士とは思えない程、弱々しいものだった。

『嫌だ……やめてください……俺は、俺は自由に、生きていたいだけで……』

ホーンの意識は夢の中。そこでは、悪夢がフラッシュバックしていた。

『こいつが戦士になるんだってさ！ 子種無駄打ちして、生きてる価値無いんじゃないか？！』

冷たい地面に垂れる、自身の精液。そしてホーンの男根は、戦士の掌にあつた。腕を縛られ、足を拡げさせられ、秘所を見られながら男根を扱われる。そして、我慢出来なくなつて射精してしまつた様を、十四の頃のホーンは泣く泣く受け入れることしか出来なかつた。

『ねえさん、つ、もつ、やめて、くださ、い……ん、ああ、っ！？』

ホーンの懇願も虚しく、戦士はホーンの男根を激しく扱き続ける。クチュクチュと響く音に合わせて、周囲の戦士達

の罵倒が合わさった。

『可哀想……せっかくクイーンに認められたのなら、黙って番になれば良かったのに』

『でもさ、こいつ顔は綺麗じゃね？ 女だったら幸せな一生だったろうにな！』

『次の分も残しといてよ！ 一人で遊ぶのはずるいんだから！』

皆、好き勝手に言っただけでホーンを弄ぶ。ホーンは悔しくて、悔しくて、たまらなかった。しかし、その気持ちがあっても、快楽には勝てない。熱いものが迸るのを、ホーンは止められなかった。

『やだ、っ……ああ、っ、でる、っ、いやだ……いきたくない……ああっ！』

再び、精が放たれる。悲鳴が湧き上がると共に、ホーンは唇を結びながら、咽び泣いていた。

『此処じゃ、子供を作るまでは性交出来ないものね……男の子なのに、こんなに良い身体していて、それで童貞卒業出来ないなんて可哀想……』

『そうだ、男の子としては使えないから、せめて私たちと同じ女の子にしてあげる。みんな、ちゃんと足持ってあげてね！』

『にしても、やっぱりオスは貧弱だなあ？ この程度で泣くなんてさあ！』

彼女達の言葉の意味が、ホーンにはわからなかった。苦しくて、辛くて、助けて欲しいのに、誰も助けてはくれない。

そして、ホーンは夜な夜な犯される。本来、経験する必要のない苦しみは刻まれ、夜が明けた頃には、己の精液に塗れた身体を引きずって、一人部屋に戻る。

そんな生活を、ホーンは長らく続けていたのだった。

ホーンを罵倒する声。

前を扱かれ、後ろを責められ、止めどなく溢れる熱を抑えることも出来ず。

悔しくて、悲しくて。惨めになって。それでも彼は、誰かの役に立ちたくて。矛盾を抱えたボロボロの身体が立ち止まる。いつそ、死んでしまった方が楽かもしれないと思いつ、何度も城の高いところから身を投げようとしたが、それは叶わなかった。

ホーンはただ、生きたかった。自由に、そして、大切な家族と共に。



「ホーンさん、ホーンさん」

優しい声が聞こえて、ホーンはゆっくりと瞼を開ける。いつの間にか眠っていたホーンの傍には、リリスの姿があった。

「お疲れみたいです。最近、お忙しいように見受けられませんが」

「ああ、リリス……すまない、疲れて、眠っていたようだ」

ふと、身体に温もりを感じて、ホーンは視線を落とす。椅子に座った時にはなかった毛布が、身体にかけられていた。

「これも、君が？」

「はい。風邪を引かないように、と眠っていたのですが、ホーンさんがあまりに苦しそうだったので、起こしちゃいました」

リリスは少し心配そうな様子だが、ホーンは軽く微笑み返した。

「それは、恥ずかしいところを見せたな。昔の夢を見ていたようだ。心配させて申し訳ないが、俺なら大丈夫だ」

大丈夫、それはホーンにとつての魔法の言葉だった。たとえ心が折れそうになっても、大丈夫と唱えれば、本当に大丈

夫な気がする。だが、今のホーンは胸の奥の痛みを忘れられずにいた。

そんな姿を、リリスは見つめる。小さな手をグッと握り締めて、喉を開いた。

「……ところで、ホーンさん。ひとつ、よろしいでしょうか」
「ああ、何だ？」

「実は……ティモさんから、言伝を預かっています」

「ティモから？ 何か悩みでもあるのだろうか」

ホーンには思い当たる節がなかった。毎日、朝食と一緒に食べているし、家事については分担もしている。寂しい思いと、面倒な思いはなるべく、させていないつもりだった。

「ティモさん、ホーンさんが夜遅く、鍛錬を兼ねて魔物を退治しに行くのを、やめて欲しいとおっしゃっていました」

だが、ティモから伝えられたホーンへお願いは、ホーンにとっては些か、予想外のものだった。魔物退治は立派な任務であるし、成長のためにも不可欠な仕事だ。城を、家族を守る者として、ティモが反対する理由をホーンはすぐには見つけられなかった。

「……理由はあるだろうか。これも、大切な仕事だと、ティモなら分かってくれていると思ったが」

「ティモさん、ホーンさんが心配なようでした……最近ほ

特に忙しいようですし、無理をされているのではと」

「無理か……そうだな、無理はしているかもしれないが、それでも身体は元気だし、精神的にも問題はない。すまないが、やめる理由が見つからないな」

それを受けたリリスは、ホーンへティモの気持ちをどう伝えれば良いか、わからなくなつた。

（ティモさんのことを考えたら、仕事を減らして傍に居てあげるのがベストだつて、ホーンさんならわかるはずなのに……ティモさんがホーンさんを心配する気持ち、どのように伝えたら良いのでしょうか……）

思考を巡らせているリリスだったが、ティモとのやり取りを思い返しているうちに、ホーンへ伝えておかねばならない、妹の密かな感情に辿り着いた。

「ティモさんはホーンさんに、ただ、傍に居てもらいたいのではないでしょうか」

「傍に、居てもらいたい……？」

「はい。ティモさんにとってホーンさんは、大切な存在です。だから、ホーンさんが魔物に襲われて怪我をしたら……万が一、命を落としてしまったらどうしよう……と不安になつているのではないのでしょうか」

リリスに言われて、ホーンは自分が気付いていない視点

を与えられた。心優しい彼女なら、そんな心配をしてもおかしくない。嬉しい気持ちは生まれたが、ホーンにも言いがあつた。

「それはありがたい。だが、それでも俺は、今の生き方を変えるつもりはないよ。ティモは俺よりもずっと強い。しかし、元から戦士になりたくてなつたわけではないからな。俺はティモに、剣を握らずに生きていて欲しいと思つている。そのためにも俺は、ティモも守れるくらいに強くなる必要がある。今の力では、まだ、足りないんだ」

城を逃げることとなつた十四の夜。ティモを連れて行くことが出来なかつた後悔。

そこから五年。残された側のティモが抱いていた苦しみ、妬み、憎悪。それを突きつけられたホーンは、今度は彼女のためにも使命を全うしようと思つて決めた。だが、ホーンの信念は、ティモの願いを叶えることとは相性が悪かつた。

「ホーンさんにとって大切なティモさんが、無理をしてほしくないと思つています……それでも、ホーンさんは、戦い続けるおつもりですか。それも、たった一人で」

「……家族を守るためにも、この仕事は必要だ。さつきも言つた通りだが、むしろ俺はティモにこそ、戦つて欲しくない。傷付く想いをするのは、俺で十分だ」

ふと、かつて妹が剥き出しにした、黒い感情が蘇る。ホーンの身体を蝕んだ、陰惨な過去が脳裏を過った瞬間、ホーンは、強く拳を握った。

「……俺は今よりずっと強くならねばならない。強くなければ、誰も守れない」

せめて、ティモの力に追いつくまでは、戦う必要がある。ホーンは自分の信念と引き換えに、妹の願いをグッと飲み込んだ。

それを受けたリリスはというと、複雑な心境に陥っていた。ホーンの言い分はわかるものの、ティモの気持ちも大切だと感じる。

それ以上にリリスは、彼の発言に違和感を持っていた。誇り高く、責任感のある、しっかりした考え方ではあるが、大切なものが欠けているように見えたのだ。

「……ホーンさんの気持ちはわかりました。それを否定するつもりはありません。ただ……」

リリスは冷たい声で、ホーンに問いかけた。

「ホーンさんは、『誰』のために生きていますか？」

「俺が信じる『家族』のためだ。その中には、君だって入っている」

「……そこに、ホーンさん自身が入っているのですか」

自分自身はどうか。ホーンは口を開こうとして。

(自分の、ため……?)

リリスの問いかけに、ホーンは答えられなかった。

強くありたい理由も生きる理由も全て、エイトやティモのような弟妹たちを、家族を守るようになりたい、そこに繋がっている。だが、ホーン自身の居場所『家族』の輪の中にはなかった。彼はいつだって、『自分一人の犠牲で済むなら』と考えている。そうでなければ生きる資格はないと、ホーンは本気で信じていた。

「わたしは、ホーンさんが苦しむ姿を見たくはありません」

リリスは寂しそうにホーンを見た。

ホーンは何も気付いていない。ホーンの大切にしている家族が、ホーンに求めているものを。

「すまない……ただ、今は我慢して欲しいと、ティモには伝えておく。リリスの気持ちも受け取ったが、俺なら大丈夫だ」
「……わかりました」

ホーンの言葉を受け、リリスは淡々と頷いた。だが、事態は何も変わらない。また、ホーンの我慢が一つ、積み上がっただけ。

そしてこの時、リリスは決心する。

孤独に戦う青年へ、大切なことを解らせる必要がある、と。

翌日。ホーンは他の戦士たちとの手合わせに参加していた。

クイーンの右腕であるホーンのもう一つの役目は、クイーンの親衛隊員を統べる、隊長という役割だ。

メンバーは、クイーンに認められた精鋭たち。隊長に任命された時は不安を覚えたが、一族の悪習を変えようと戦おうとするホーンの姿勢を、隊員たちは皆、応援してくれていた。

「兄さん、今日もお疲れ様です」

「最近はずいぶん忙しいが、身体は大丈夫か？」

手合わせの時間が終わってすぐ、隊員たちはホーンの元へ集まって来た。といっても、彼女たちも『家族』である。

形式めいたやりとりはなく、ホーンにとっても彼女たちは気兼ねなく話せる、大切な家族の一員であった。

「お疲れ様。身体は大丈夫だ」

「あまり無理をするなよ。可愛い妹と弟を泣かせては世話ないからな」

「ああ。気を付ける。俺は今からクイーンのところへ行くから、皆はここで解散だ。また次の任務で」

隊員たちとの軽い会話を終え、ホーンはクイーンの元へと向かった。

城の最上階、玉座の間に赴いたホーンは、煌びやかなドレスに身を包むクイーンを前にして跪いていた。

「ホーン、貴様に新たな試練を課すぞ」

クイーンが放つ凄まじい威圧感に、ホーンの心拍数はグングン上がっていく。

「ああ、受けて立とう。今回の試練はなんだ」

クイーンは満面の笑みを浮かべて、あるものをホーンへと突き出した。

「今日からしばらく、これを着けて生活しなさい！」

クイーンが突きつけたもの。ホーンはじつと、観察する。

最初は金属製の腰布のようにも見えたが、それにしてはあまりにも小さい。何より、人差し指と中指を合わせた程度の太さがある管が目に入った時、ホーンは嫌な予感を覚えた。

「……それは……まさか」

「ああ、聞いて驚くがいい。貴様の射精を管理するための道具だ！」

クイーンは高らかと宣言する。対照的に、ホーンはやれやれと頭を抱えた。

「どうして、うちの王はこんなことばかりに思い切りがい

いんだ……」

「お？ また変なことを言い出したな、って顔をしているようだな？ 言っておくが、貞操帯をつける理由は明確だ。知能の発達した魔物が雄を籠絡し、一国の情報をこっそり抜き取ってしまった……そんな恐ろしい話も聞いてだな。そこで余は思いついた！ ホーンが己の欲望をコントロール出来るようになれば、余の従者としては申し分ない。貴様にとっても、今より一段と強い戦士に成長出来る良いチャンスだ。悪い話じゃないだろう？」

クイーンは至って真剣なようだが、ホーンはため息しか出ない。

（この手の鍛錬で鍛えられた試しはないのだが……そもそも、お前が俺を使って欲求を発散したいだけだろう？）

口先ではホーンのため、のような言い草だが、それは違う。ホーンの脳内には、過去の悪行の数々が浮かんでいた。

ある時は、訓練と称して寢室に連れ込まれて秘所を開発されたり、洞窟へ宝石の探索を命じられたが、数々の罠にかけられた拳句、ティモとエイトに化けたサキュバスに嫌という程搾り取られたり。酷い目に遭わされた経験があるが故に、ホーンはクイーンが思い付きで指示する訓練の身をあまり信じていなかった。

だが、ホーンはクイーンの要求を否定しない。渋々、という表情を見せるだけで、軽く頷いた。

「わかった……その課題、受けてやる。断ったところで、逃れることも出来ないだろうからな」

「そうね、そうよね……隷属関係がある以上、ホーンちゃんに嫌だつて喚いてもコレは着けさせるもの……やっぱ貴方は私の最高傑作よ!!!」

クイーンは腕を広げて、ホーンの大きな身体を包み込む。

クイーンはホーンに胸を押し付けて来るが、彼女の誘惑にホーンは全く反応しなかった

「やめてくれ、苦しいだけだ。それに、所々口調が変わるのをなんとかしてくれ。調子が狂う」

「こっちが本当の私だつてわかっていましょう？ 堅苦しい言葉はあまり使いたくないの。ね、早く着けましょう、これ！」

「あーっ!!! もう好きにしろ!!!」

こうして、ホーンの男根に貞操帯が装着される。目を輝かせるクイーンに対し、ホーンは溜息が止まらなかつた。

ホーンがクイーンの要求を否定しない理由は、明確に存在している。それは、ホーンが持つ素養に起因していた。

実のところ、ホーンは男でありながら、体内に保有する元素量が城の全ての住人の中でもトップクラスだった。しかし、男には元素を魔力に変換する機構が備わっておらず、ホーンも例外ではなかった。

しかし、ホーンがクイーンと主従関係を結ぶ際、ホーンは元素を魔力に変換する力を授けられた。加えて、クイーンはいざとなれば、圧倒的な元素量をホーンへ分け与えることが出来る。ホーンは疑似的に、不死身の身体を有しているのだ。

ホーンは、クイーンの力が無ければ戦士として無力である自覚があった。不用意に逆らって、クイーンの逆鱗に触れてしまった時、主従関係を断たれてしまったら。

強く出ることが出来ない己の弱さを嘆きながら、ホーンはクイーンに課された試練を、甘んじて受け入れるしかなかった。

ここから、ホーンは一ヶ月間の、苦しい射精管理生活が始まることとなる、はずだった。

最初は、自分で自慰行為を制限される苦しみがどの程度かわからず不安はあった。しかし、日々の忙しさに忙殺され、毎日必死に過ごしているうちに、一ヶ月はあっという間に

経ってしまった。

結果、何の苦しみも起きることなく、貞操帯はクイーンのものへ返却されることとなった。

「何の進展もなかったじゃない!? 普通こう……禁欲の結果、いきたくていきたくて仕方ないものじゃなくって!?」

涼しい顔をするホーンに対し、想定と違っていたクイーンは怒りに満ち溢れていた。

「いや……全く……」

「どうして! その歳の男が! 全然欲情しないなんておかしすぎる! これが娘たちの仕打ちか! ならば許されない……ホーンを不全に追いやった奴ら……殺さねばならん……!」

「そ、それはやりすぎだろう……今回は、自分の欲求に構っている時間がなかっただけだ」

ホーンは頭を掻く。性欲がないわけではない。一定周期で、どうしようもない程、劣情を発散したい時はやって来る。今回はたまたま、そのタイミングが来なかっただけだった。

「な、何かあるだろう……その、アレが小さくなって大きさが戻らないとか、そういうことが!」

「あ、ああ……慰める必要がないと割り切れたからか、集中力が高まった気はするな」

ホーンが思い返すと、貞操帯を着けている期間は自ら処理するタイミングがなかったため、雑念が入らず仕事や鍛錬に集中することが出来ていた。そのことをクイーンに伝えようと、彼女は悔しそうに椅子を叩いた。

「くうっ……そんな……ホーンちゃんの痴態をアテに酒でも飲もうと思っていたのに、全く効果がないなんて……」

悔しがるクイーンに、ホーンは苦笑する。

（相変わらず、悪趣味な考え方だな……まあ、俺には関係ないことか）

予想通りの結果が出ずに苛立っているクイーンを尻目に、ホーンはすっきりした表情で帰ろうとする。たまには思い通りに行かない側の立場にもなってみると、ホーンは心の中で珍しく、優位な立場でクイーンを見下ろしていた。

だが、クイーンがこの程度で終わるはずもなく。貞操帯を地面に叩きつけたのちに、クイーンは不敵な笑みを浮かべた。

「くーっ……いいわ、そんな涼しい顔されてばかりじゃ悔しいもの！ こっちには、とっておきがあるんだから！」

クイーンは手をパンパンと鳴らす。すると、王の間に淀ん

だ空気が流れ始める。空気を察したホーンの足が、ピクッと止まった。

「この匂い、もしや……」

ホーンが妖しい雰囲気を感じたのもつかの間、クイーンの前に『二人』の魔物が現れる。ホーンが振り返ると、そこには淫らな気を纏ったサキュバスがそれぞれ、ホーンへ視線を送っていた。

「今日も間抜けな顔ね、ホーン。今日は、いや、今日からはたつぷりと虐めてあげる！」

高らかに宣言する、ピンク髪のサキュバス、リリム。明らかに雄を誘惑するように、肌色の谷間を見せて来る彼女は、リリスの双子の姉。しかし、性格はリリムと違い、高圧的で執拗だ。サキュバスらしいとも言えるが、ホーンは彼女を良く思っていない。現に、ホーンはリリムを見ただけで、眉間にしわを寄せていた。

（リリムは苦手だ……目に入るだけでも嫌になる……）

給仕として働き始めた頃のリリムは言葉遣いも丁寧で、エネルギー源としてホーンの精を貪る以外は優しい雰囲気放っていた。しかし、今は違う。ホーンが靡かないとわかってから、リリムは敵意を剥き出しにして、昼夜問わずあの手この手で襲ってくるようになったのだ。

「食事の時間以外は関わってくるなど言っているだろう。俺は忙しいんだ」

「そう言っつて、毎回毎回真つ赤な顔で子種を搾り取られているのはどこのどなたかしらね……」

「生理現象を押し留める方が身体に悪い。効率的だと言ってくれ」

リリムとはいつだつてこの調子だ。ただ、リリムの隣で二人のやりとりを微笑ましく眺めているリリスについて、ホーンは別の感情を抱いていた。

「それに比べて、リリスには世話になってるからな。いつも感謝している」

リリスにも、ホーンは自身の精を彼女に提供することがある。しかし、それ以外は何の問題もない。エイトやティモの友達になってくれる点も、ホーンの信頼を高めていた。

「ありがとうございます。ちなみに、リリム姉さんはこれでも、ホーンさんのことを慕っているのですよ？　ですよね、リリム姉さん」

「こら！　こいつの利になることを言うな！　サキュバスたるもの、最高品質の雄から精を徹底的に奪うのが生き甲斐というもの。だがこいつ、子種は山ほど吐き出す癖に、一

度も私たちに靡いたことがないんだぞ！　普通『リリム様のおっぱい飲ませてください♡』とか『リリム様の手で気持ち良くしてください♡』とか、私はそういう展開を望んでいるの！　いいかホーン、今日こそお前には『イかせてください、リリム様♡』と言わせてやる！」

「好きにしる。この身体が壊れようとも、貴様に傳いてやるものか」

どれだけ果てようとも、心まで奪われなければ良い。ホーンは苦しい経験を経験を糧にして、快樂との付き合い方を覚えていた。

とはいえ、サキュバスの誘惑を精神力だけで跳ね返す難しさも理解している。ホーンは懐に手をやると、そこにあるものを強く握り締めた。

(リリスがくれたお守りがなければ、平常心では居られないだろうな)

ある時、ホーンがリリムの搾精行為に呆気なく果ててしまふことをリリスに相談した時、ホーンはリリスから呪い(まじない)の込められたお守りを渡された。並の淫魔の技なら無力化する効果があるらしく、リリムの誘惑に対して、多少の耐性を得ることが出来る代物だ。

「つくづく、その、涼しい顔が気に入らないわ！　散々私の

手で、口で、胸で、足で、みっともなく果てて来たくせに！」
「何度も言うが、果てる事には慣れてる。羞恥心などまったく捨てているからな。お前に箠絡されることは今後も一切ないだろう」

「まあまあ、二人とも落ち着いて……」

仲裁に入るリリスだが、慎ましく振舞う彼女もサキュバスであることに変わりはない。技の巧みさではリリムに劣る部分はあるが、元素量と魔力の強さは、リリスの方が上だ。そして、彼女にもサキュバスとしてのプライドがある。強い男を屈服させたい欲望は、リリスも例外なく兼ね備えていた。

（今から行う儀式は、ホーンさんの目を覚まさせるため……ホーンさんの、本当の姿を取り戻すため……辛いとは思いますが……どうか、ご容赦ください）

リリスは小さく柔らかな掌を握り締め、サキュバスとしての役割を果たすため、意識を切り替える。二人の間に入りつつ、リリスはホーンの方へ歩み寄った。

「ホーンさん、少し目を瞑っていただけませんか」

「ん？ リリス、何をするつもりだ……」

ホーンが問いかける前に、リリスはホーンの耳元で囁いた。

「わたしの言うことを、ちゃんと聞いてください……まず、目を瞑って……」

優しく、甘い吐息と共に、リリスの言葉がホーンの脳内に刻まれる。

その瞬間、ホーンの臉が、すうつ、と降りる。ホーンは、目を瞑ろうとはしていない。これが、リリスの『呪い』の力だった。

「リリス、これは一体……」

「気にしなくて良いですよ……ほら、肩の力を抜いて……」

「あ、ああ……」

（何だ、これ……頭が……リリスの言葉を聞いて……身体が……操られている……？）

ホーンの身体から、力がするすると抜けていく。動こうとしても、足に力が入らない。

「いいですよ、そのまま……今からちよっぴり、ちくつ、としますが、すぐ終わりますので」

ホーンは油断していた。リリスはいつだって、自分の味方になってくれているとばかり思っていたが、それは違っていた。

リリスはホーンの下腹辺りに掌を翳す。すると、彼女の掌は毒々しい色に包まれた。

「これは、快樂と絶望の紋章。刻まれたら最後、わたしのものになって朽ち果てるか、わたしのものになる前に朽ち果てるか……ふふ、あなたはどっち？ わたしを、全てを満たす程に、愉ませて下さいね……ホーンさん♡」

そして、リリスの掌が妖しく燃え盛ると同時に、ホーンの身体にも激しい電撃が走った。

「づぐ、ん、づー!?」

ホーンには何が起きているかわからない。ただ、言い知れぬ恐怖がゾクゾクと全身を駆け巡っている。

(何だ、これ……腹に……何かが刻まれて……まずい、何か大切なものが、『書き変わって』いく……!?)

恐怖を知覚した頃には、リリスの儀式は終了していた。彼女は平静を取り戻し、軽く息を吐いた。

「ホーンさん、目を開けて大丈夫ですよ」

彼女の言う通り、ホーンは目を開いた。だが、状況は既に変わっていた。

リリスの掌が翳された下腹には、焼けるような痛みが走り始めていた。

「リリス、これは一体……」

ホーンはリリスへと視線を送る。普段は穏やかな笑みを浮かべている彼女の顔は、サキュバス本来の淫靡なものに

変わっていた。

「ふふ……ホーンさん、私が『サキュバス』だってこと、忘れていませんか？」

「リリス、きみ、は……もしや……」

「んふふ……では、ホーンさん、少し手を出して下さいな」
彼女の要求に、ホーンは躊躇った。無性に喉が渴いて唾を飲むが、治まることは無い。

(手を出してはいけない……だが、俺は此処から逃げられるのか……足が全然、動かないぞ……)

そして、ホーンは感じていた。手を出したら最後、とんでもないことが待っていると。しかし、直感に従って逃げようとしても、身体は石化してしまつたように動かない。そればかりか、ホーンの意思に反して手が、リリスへと伸びてしまふ。これもリリスの呪いの効果だった。

(まずい、このままでは……だが……身体が……言うことを聞いてくれない……)

絶体絶命のピンチに、ホーンは、どうしようも出来なかつた。

「ふふ……良い子ですね、ホーンさん。ですが、今からあなたには、厳しいおしおきが待っています。楽しみにしてくださいね♡」

リリスはそう言って、無防備なホーンの右手を両手で、しっかりと握り締める。ホーンの逞しい掌を握ったリリスは、人知れず高まりを見せていた。

(この大きくて、優しい手が、いつまで抗う気力を残せるでしょうか。そして、自身の無力さに気付いた時、あなたはちゃんと……救いの声を上げられるでしょうか?)

サキュバスとしての欲望が、リリスを突き動かす。アームカバーから顔を出している、ホーンのしなやかな指を愛撫したのちに、リリスは唇を、ホーンの手に優しく押し付けた。

「ふふ、はははは！　しくじったな、ホーン！　リリスの力を思い知れ！　これから、貴様の処刑が始まる！　良いか！　今なら泣いて詫びれば許してやろう！　リリスの甘い夢に溺れて、身も心も快樂に堕ちてしまえ！」
後方から、リリムの歓喜がホーンの耳に届く。どういう意味かを問い返そうとしたが、それは叶わなかった。

「んん、っ、う、っ……ああ、っ!?」
リリスにキスをされた指先から、耐えきれない熱波が内側を駆け巡る。それは腹の奥でバチバチと迸り、ホーンに襲いかかった。

「はあ、はあ、はあ、っ、ん、あ、っ……い、んん、っ!?」
それは、ほんの一瞬のことだった。装束の中で男根が頭を

上げ、勃起したかと思えば、ぬるい不快感があつという間に股間へ広がった。

ホーンは、達してしまっていたのだ。

「はあ、っ……くそ、っ、何が起きて……っ……はあ、くう、っ……」

とくとくと、白濁液は男根から外へと溢れ、ホーンの装束を濡らしていく。だが、男根や性感帯へ直接、刺激を受けたわけではない。ホーンは己の異変に動揺を見せつつ、リリスへ問いかけた。

「リ、リリス……俺に、何を……は、くっ……まずい……また、出る……っん、くっ!?」

ホーンの絶頂は途切れない。そして、リリスはホーンが達していることもお構いなしに、指を絡めてくる。

(くうっ……直接……扱かれているみたいだ……あ、っ……ダメだ、射精が、止まらない……また、出てしまう……っ!?)

ホーンは太腿を擦り合わせ、謎の快感から耐えようとするが、まるで効果はない。トプトブと精液が溢れるのを感じることしか出来なかった。

一方、リリスはホーンが達している様をしっかりと確認していた。装束の内側で蠢いている肉棒を想像するだけで、

齧り付いてしまいたくなる欲求に駆られていた。

（服の内側で苦しそうにしているのを見ていただけでも、わたしも一緒に、果ててしまいたい……ピクピク動いて、呆気なく射精して……ホーンさん、可哀想……ああ、このむせかえるような濃い香りがたまらない……でも今回は、ホーンさんの精液を頂戴するのが目的じゃありません……ちやんと我慢しないと……）

リリスは己の欲求を律し、ホーンの手を離す。リリスから解放されたホーンはたちまち、床に膝をついた。

「はあ、はあ、っ……リリス、君は一体、俺に何を……」

「ふふ……ホーンさんには申し訳ありませんが、お腹に『淫紋』を刻ませて頂きました。その淫紋、ホーンさんの身体に誰かがちよつとでも触れると反応して、達する仕組みになっっているんですよ」

「い、淫紋……サキュバスが使う……技の一つ……」

「ええ。効果は様々ですが、わたしの淫紋はとても強力です……刻まれたら最後、身体はジワジワと快楽に触まれ、四六時中、絶頂の間際を彷徨うこととなるでしょう。そして、ホーンさんが射精出来る瞬間は二つ。一つは、誰かの身体に触れた時。もう一つは、わたしとリリム姉さんが許可した時。そして効果自体は、わたしとリリム姉さんの思い通りに書

き換えることが出来るのです」

リリスが言っただけで、ホーンは彼女の言葉の意味を思い知らされる。淫らな熱は腹の底から、全身に広がっていくのがわかった。

「はあ、はあ……っ、くっ……あ、ああ、っ……はあ、はあ、はあ……っ、んん、っ……」

（駄目だ、息をするだけで達しそうになる……これが、サキュバスの力なのか……）

しかし、寸前のところで熱は高止まりした。あと少し、ほんの少しのきっかけがあれば絶頂を迎えるというところで、男根は時を止めたまま動かなくなってしまった。

「クイーンよ、見ましたか！　これがリリスの真の力！　素晴らしいでしょう！」

「良い、すごく良いわ、二人とも！　ホーンちゃんが可哀想なところを見るの、私、大好きなのよね……美しいものは、壊れる瞬間も美しいと言わない？　あ、ホーンちゃんに報告だけど、しばらくはリリムとリリスの管理下で頑張ってもらうわね。仕事は今までと変わらないけど、一体いつまで我慢出来るのかしら……」

奥ではクイーンとリリムが、ホーンの状況を嘲笑っている。反抗してやりたい気持ちはあったが、今は立つことすら

ままならなかった。

「ちなみに、この件はわたしが提案したものですから、クインにやめるをお願いしても無駄です。そして、淫紋を解く条件は一つだけ。でもそれは、ホーンさんが頑張つて探し出してくださいね」

「そんな……君が、どうしてこんなことを」

「……どうして？ 聡明なホーンさんなら、ご自身で答えに辿り着けるはずですが、それとも、答えを教えて欲しいですか？」

「あ、ああ、教えてくれないか……」

「では、『リリス様、無様に情けなく死にたくなるくらい気持ちよく、イかせてください♡』と、わたしに言ってください。リリス姉さんにでも良いですよ」

「くっ……そんなこと言えるわけが……」

「……ええ、そうです。サキュバスに傳く、それはすなわち、尊厳を全て奪われることと同義ですから。今、そんなことをホーンさんがおっしゃったら、わたしはあなたの精を搾り取って殺していたかもしれませぬ……」

ホーンの中で、リリスに抱いていた印象がポロポロと崩れ落ちていく。リリスとは比べ物にならず、下手をすればクインよりも恐ろしい邪気と殺気を放っているのだ。

「それは、本当か？」

「はい。本当です。ホーンさん、わたしが優しくしていたから、勘違いしていませんか？ ヒトの信頼を得て、その後、跡形もなく精を頂いてしまうのが、サキュバスの常套手段。良かったですね、他の悪いサキュバスに捕まらなくて」

此処まで言われてしまうと、ホーンも彼女の言うことを信じる他なくなつてしまつた。今出来ることはただ一つ。淫紋を解く鍵を見つけることだった。

「……わかつた。けど、俺は、君のことを信じている。此れは君が俺に与えてくれた『試練』だろう。だから、俺は精一杯立ち向かう。時間はかかるかもしれないが、見守つていて欲しい」

この状況に陥つても、ホーンはリリスを信じていた。リリスは何かしらの目的を持つて、淫紋を刻んだのだと。彼女の欲望を満たすだけの、道楽で行つたものではない、と。

それを受けたリリスの心は、激しく傷んだ。どこまでも真つ直ぐなホーンに対し、リリスは口を結んだ。

（ホーンさん……どうしてそんな、真つ直ぐに物事を捉えてしまうのですか……つて、そうだ、わたしが、絆されてはいけません……もっと徹底的に、わたしが、悪者だということころをホーンさんに教え込まないよ）

心を鬼にして、リリスは再びホーンに近寄る。生優しい言葉をかける余裕すら、ホーンから奪ってしまうため。

「ありがとうございます。では、今ここで、無様に射精してくださいな♡」

リリスは、情念を込めてホーンに耳打ちをした。

「おづ、んんづ、ぐぐ、づー!？」

リリスの耳打ちから間もなく、ホーンは耐えきれず絶頂した。装束を突き破らんと、内側で男根がビクビクと揺れている。白濁液に蒸れるズボンからは、リリスの好きな香りが広がっていた。

「ああ、息苦しそう……こうして、指先で、カリ、カリ、してあげますからね」

「ああ、っ!？ やめ、く、つ、ああ、っ!！」

ズボンの向こう側に隠れている亀頭を、リリスが指先でほんの少しなぞっただけで、ホーンはリリスの命令通り、無様に射精を続けた。リリスは愉しくなって、ホーンの鍛え抜かれた太腿にしがみつき、頬を擦り付けた。

（ああ、剥き出しにして、食い散らかしてしまいたい……でも、今回はこれが目的ではありませんよ、わたし！ 目的を見失わないで！）

リリスが自身の欲望と戦っている間にも、ホーンは射精

を止められずにいた。溢れ出した精液は股間から、股下、太腿から膝裏にかけて、居場所を求めて流れ落ちていく。

（本意だが、気持ち良すぎ……だが、このままでは、リリスの思っ壺だ……耐えなければ、この試練に、立ち向かわなければ……）

ホーンは力づくで、リリスを引き剥がす。戦士としての敵意を剥き出しにして、ホーンはリリスに相対した。

「はあ、はあ……っ……君の気持ちは、わかった。だから、俺も戦う。俺は、絶対に……絶対に、負けない！」

「その心が、いつまで耐えられるかが楽しみですよ……ちなみに、誰かに助けを求めても基本は無駄ですよ。わたしたちが見ていますから。誰に救いを求めるかは良く考えてください。後、この淫紋、並の男性ならすでに失神して、再起不能になるくらい効果がありますが……ホーンさんは強いから耐えられていますよ、このまま放っておいたらどうなるかわたしにもわかりません。辛くなったらいつでも呼んでください。その時は、たくさん遊んであげますから♡」

クスクス笑う魔物たちを前にして、ホーンは顔を上げる。その瞳はキラキラと輝いていた。

この程度、もう五年の間に何度も経験してきたのだ。襲われ、犯され、尊厳も何もかも奪われてきたのだから、命が取

られない限りは戦って、抗ってやろうと、ホーンは決めていた。

試練は全て、強く逞しくなり、誰も傷付けぬよう、守り切れるようになるため。

彼自身が気付いていない狂気を孕んだ気高いプライドを握り締めて、ホーンは改めて宣言する。

「ああ、そうならないよう、お前たちの気が済むまで戦ってやる。俺は、心まで屈するつもりはない！」

そしてこの日から、ホーンの、淫らな戦いの日々が始まった。